

中世における東大寺油倉の実態

山 本 博 子

はじめに

東大寺には、増減を重ねながら創立以来現代に至るまでの間に、大仏殿油倉・戒壇院油倉・東大寺八幡油倉等の油倉が存在した事は、史上明らかである。今、小考が対象とする油倉は、それらのうちの大仏殿油倉であって、それを単に油倉と称することにする。

東大寺の中世における財政管理の中心は、その初頭において勸進所であった事は言うまでもないが、それに続いて中心となったのは、この油倉であった。

油倉とは、言うまでもなく油貯蔵庫であり、油貯蔵の機能を備えている事のみにおいて、その目的が満足されるものであるが、これが、いかなる経済活動の機構・財源によって、寺内財政管理の中心となるに至ったかを追求しようとしたのが、小考の目的である。

小考では、油倉経済活動の実態を、東大寺に残る古文書と油倉の遺趾の観察を通して、できる限り追求を試みた。

現在、東大寺には、油倉と称する施設も建造物も存在しない。そこで、油倉の実態を解明する第一歩として、まず、油倉の寺内における設置場所から考察したい。

江戸時代、元禄六年に作成された東大寺所蔵「東大寺中寺外惣絵図竝山林」という略地図に、現在の持宝院の門前よりやや北東斜面の中腹に二棟の校倉が双倉となっており、油倉と注記されている。この校倉のうちの一つは、現在の東南院経庫で、他の一つは、現在の手向山八幡の宝庫である事は、筒井英俊氏指摘のとおりである。^①

ところが、この校倉を実査したところ、建物の何処にも油の付着を見ない。しかも、厩大な量を要する筈の大仏灯油の貯蔵施設としては、その規模があまりにも小さい。^②

以上を総合して、この校倉が、実際に大仏灯油貯蔵の機能を備えていると見ることは、到底困難と言わなければならぬ。故に、今触れた「東大寺中寺外惣絵図竝山林」と呼ばれる略地図にいう「油倉」の称は、事実を称したものではなく、おそらく中世か近世初頭から上司倉の一部を指して誤伝されるようになったものであろう。この略地図が作成された江戸時代においても、油貯蔵の事実がない事は、『東大寺年中行事記録』正徳六年（一七一六）四月の条に^③

一、同日、油倉ニ古鉄類多有之ニ付、大仏御普請方用ニ可立類可有之哉、

同文書、享保十六年（一七三一）九月の条に、^④

一、七日、並河五郎、秋田大助・善助、竜松院如法院同道ニ而寺中古文書并油倉ニ有之古反古等為一覽、地藏院江
入来、料理出候、入夜披覽

とある事からも裏付けされる。

ここで、小考の対象とする中世の油倉設置場所を追求してみる。

油倉は、油の搬入・保管、及びそれに併う事務的活動と可燃物の大量貯蔵による危険回避上、寺内の宗教的中枢部より離れて位置する事が望ましい事は、言うまでもなからう。その点において、楞伽院のあった「水門」の近傍に油倉の坊舎も設置されていたと考えて不都合はない。^⑤ 楞伽院と油倉は、後に、油問職を楞伽院に譲る等、密接な関係が認められ、むしろ両者が、地理的に近距離に位置していたと考える方が自然といえる。

二

油倉が、中世に顕著な経済活動を推進し得た根本的要因は、奈良時代頃にその端を発する。

天平勝宝二年（七五〇）二月二十七日付の聖武太上天皇大仏灯油田施入勅願文案に、^⑥

〔端裏書〕
「大仏御灯油施入文案院宣□」

勅

奉施入 大倭国大仏御灯油免田陸拾陸町事

合

御油陸斛陸斗町別考斗内

壹斛柒斗式升捌合

右、大仏殿御灯料

（中略）

中世における東大寺油倉の実態（山本）

捧上件物、遠限日月、窮未來際、敬納東大寺大仏御灯料、永年莫動、以為福田、

(下略)

天平勝宝二年二月廿二日

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

とある。これによると、奈良時代、天平勝宝二年に、灯油油田六十六町が勅施入されたかのであるが、この文書は、偽文書の疑いがある故に、奈良時代に果して、大和国に六十六町の灯油田が施入されたか否かは、明確でない。

しかし、嘉応二年(一一七〇)の大和国高殿莊々官請文案に、

謹請

高殿御庄東大寺去年御油并副米未濟事

合

御油貳斛伍斗内 老斛肆斗肆升、未進老斛老斗、

副米伍斛内 肆斛伍斗陸升、未進肆斗肆升、

右、去年天下一同大旱魃也、(中略)爰当庄所負東大寺御油田貳拾伍町也、五箇庄所負六十町隨一也、

とあり、少なくとも、平安時代末期には、大和国に灯油田六十六町が存在した。

又、嘉応元年十一月十九日付の勸学院政所下文に

爰寺家灯油者、相折大仏殿万灯会法花堂千灯会大仏殿以下諸堂御明等、以土毛米者、相宛千灯会万灯会請僧供料樂人舞人所司職掌小綱下部等之酒肴、是嚴重之御願不易之仏事也、

とあり、「而彼代代油目代出納等」ともある事から、平安時代末期には、すでに油倉が、灯油のみでなく、米も収納し、それらの出納の執行責任者が、油目代と称される者であった事がわかる。しかし、この時代に、他に同様の史料を多く散見するわけでもなく、活発な油倉の経済活動を察せしめる史料もない。

先述の如く、平安時代末期において、灯油田は、大和国の六十六町のみであったが、鎌倉時代に入って、一挙に百三十余町が加わる。即ち、建久七年（一一九六）十一月三日、備前国野田保をもって、同国散在の東大寺大仏殿灯油田に替え、不輸地となすという宣旨が下された。^⑩ 続いて、建久九年十二月、院庁は、重源の請願により使を下し、備前国在庁官人と共に野田保に赴かせ、勝示を立て、その四至を画定し、勅事・院事・大小国役・国使の入勸を停止させた。^⑪ ここにおいて、野田保は、東大寺領野田荘として確立したのである。

建久八年六月十五日付の重源讓狀に、「於預所職者、以年来同行重阿弥陀仏令補任之」とあり、^⑫ 年来同行の重阿弥陀仏なる人物が、野田荘の預所職についたようである。

灯油確保の為、油倉の長である目代僧は、灯油田を管理したが、この野田荘からの年貢は、嘉元三年（一三〇五）の大仏灯油聖道戒野田荘年貢米錢注進狀に^⑬

注進 野田庄年貢米錢油倉定納事
（備前國野郡）

合

米 漆拾壹石捌斗

錢 參拾五貫文

己上

（中略）又年貢配分狀案一通進之、仍進如件、

中世における東大寺油倉の実態（山本）

嘉元三年正月十四日

油倉（花押）

とある如く、米錢で納められたから、油倉は、当然これも保管したのである。

建久七年、野田莊百三十余町が、新たに東大寺大仏灯油田として加わった事は、油倉に大きな収益をもたらした。更に、野田莊からの年貢が米錢で納められ、それを管理した事は、油倉の財政を寺内で最も豊かなものにしたのみでなく、油倉が、特殊な經濟活動を行う端緒を作ったといえる。

この事に加え、大仏殿灯油料としての田畠寄進も増す一方であつたし、又、時代は降って室町時代にもなると、『東大寺法華堂要録』寛正六年（一四六五）の条に、^⑭

一、東大寺方進物御寄付、大仏殿灯油方へ百貫□、戒壇院長老坊建立ノ為ニ三百貫文、灯方ハ日野殿、戒方ハ飯尾大和方内□計略也、其余ハ寺へ寄進也、

と記されるように、金錢による施入も行なわれていた。これは、室町時代の例であるが、それ以前から、金錢の施入が行われ始めていた事も考え得る。

いずれにせよ、ここで強調しておきたいのは、大和の六十六町に加えて、野田莊の百三十余町という灯油田の増加が、油倉の經濟活動活発化の根本となった点である。

三

前述の如く油倉は、膨大な収入をもとに、活発な經濟活動を開始する。

最初に、油倉の寺内建造物の営繕、及び寺外よりの襲撃に対する防御の軍備等巨額を要する事業への関与につい

て明らかにしたい。貞永二年（一二三三）の『油倉銭所下日記』によると、油倉は、木工楯・楯釘・城郭板、素麵代（兵糧であろうか）、弓の弦等の東大寺の防御・軍備を整備する費用を拠出している事実が知られる。^⑮又、別の文書に、「油倉西倉南米式百捌拾俵之内、拾俵為兵糧米」とあって、兵糧米をも管理していた。

嘉暦三年（一二三二）九月二十八日付の文書には、^⑯

閉籠当院、今日辰初点向油倉致物惣企事、嚴密被尋問答之处、申云、去夜来昭五師度々如告来候、自油倉造
営之要到（途ノ宛字カ）并材木等夜中密々運渡寺外為、不抑留者非□詮之議早可加其沙汰重々、

奉行法眼為坊

とあり、油倉には、造営用途・材木等も保管されていた。

鎌倉時代において、油倉は、兵糧米・造営用途・材木等の保管のみでなく、東大寺の防衛に関する費用の拠出、即ち、本寺への金融も行っていたのである。

更に、正応二年（一二八九）の東大寺修理新造等注文案に、造東大寺大行事と油倉沙汰人沙門聖念の連署を見るに及び、油倉は、造営にも関係をもっていた事がわかる。^⑰

このように、油倉の金融に関する業務は、非常に多彩になり、その責任の重大さから、目代の上に更に、知事を置くに至っている。

南北朝時代において、勧進所と油倉は、工作上で協力しあっている。康永三年（一三四四）十月二十四日付の東大寺大勧進職置文に、^⑱

東大寺油倉地藏菩薩修正料田等事、

右地藏薩埵者、沙門道俊于時油倉知事為防州・肥前両国々衙祈禱、所奉造立也、爰当倉中上下人、発信心、自去年

中世における東大寺油倉の実態（山本）

正月始迎毎月廿四日、勵懇志、述一座講席、(中略) 相副本券已下証文等、奉寄進彼地藏尊者也、(下略)

康永參年十月廿四日

大行事法眼玄重(花押)

大勸進沙門照玄(花押) 油倉知事道俊(花押)

同坊主圓道(花押)

とある。大勸進と油倉知事の僧が連署しており、東大寺造営の爲の修理料所である防州・肥前国衛領所祈禱の爲に、油倉に地藏菩薩を安置し、毎月二十四日に、地藏講を行っているのは、油倉と勸進所が協力しあっている事を裏付けている。

当初、東大寺内で最も収入が豊かであった勸進所は、寺内のいわゆる鎌倉期再興の完了と共に、その収入は激減した。それに、日を追って建造物の修理と末寺の復興を東大寺工匠に沙汰しなければならない責任がある。これに引換え、油倉の収入は、鎌倉期再興後増大した。勸進所は、営繕費を当然油倉に依存せざるをえなくなり、これが、前述の協力という形になった。

このように勸進所とも一体化した油倉の規模は、一子院に等しい程のものであったようである。応永年間地藏講頭役勤仕人数書によれば、人的構成を見ても、坊主一人、知事一人、大行事一人、僧五人、中間三人、下部十九人となっており、^⑨実際には、これ以上の人数が油倉にいたと思われる事から、相当大規模なものであったといえよう。

『東大寺法華堂要録』長録四年(一四六〇)の条に、「法花堂修理事、聖ヲ以テ油倉へ申送畢」とあり、^⑩油倉へ法華堂の修理を依頼している。ところが、寛正六年(一四六五)の条に、

余ハ油倉サタルベキ□状ヘ分明ル通申ニヨテ、油倉ヘ堅申サルトイヘ共、仮坊□ヲバ上表ス共、法花堂修理事難儀ト云々、只今事□無力堂トシテサタアテ、以後事油倉ヘ申サタ□ベキ分、惣寺節中ニヨテ満堂ヨリサタス、仍正□橋木一支、後戸沓木版一枚、油倉八幡山ニ引□フク内ヲ出ル^レ畢、シカレ共沓木ニハ成ガタキ故、新造屋古材木内ヲ佗テ取替了、

とあつて、惣寺が、油倉に修理工事の沙汰をしているにもかかわらず、容易に修理用材を提供していない。この寛正六年の記事が、長祿四年の修理依頼に関するものであるならば、五年間、修理せず放置していた事になる。

この修理用材を容易に提供していない態度は、油倉の、当時における寺内の財政に関する支配權把握を如実に示しているといえよう。

油倉は、その収入をもとに、利錢金融をも行っていた。康永元年（一三四一）六月二十一日付の大橋文書に、

注進 河上二名三斗米納下事 曆応四年
巳分

合十二石一斗三合三夕者

（中略）

現納十一石四斗七升 此内三斗四升
四合欠分別之

残定米十一石一斗二升六合

此内所下

（中略）

三斗徴使給、一石二斗 油倉借物
出之了、

（下略）

康永元年六月廿一日

二名俊覺（花押）

とある。即ち、油倉が代官俊覺に対し、貸付けを行っており、代官は、請負った年貢米の内から、それを返している。おそらくこの例のみにとどまらず、油倉は、各地所在の東大寺領莊園の代官に貸付けを行っていたと推測される。

又、暦応三年（一三四〇）十一月十二日付、勸進所油倉僧性恵借用米請取狀に、⁽²⁴⁾

勸進所請取三斗米方

（縮書）
勸進所請取

請取

八幡宮夏籠衆相節料借米事

合老石式斗者、

右米者、今年四月日、自惣伍右四斗御借用之内、為上院播磨得業御房沙汰、且所請取如件、

暦応参年十一月十二日

油倉性恵（花押）

とあり、暦応四年にも同様の文書があり、⁽²⁵⁾ 勸進所油倉は、八幡宮夏籠衆相節料の目的の為に、米の貸付けを行っていたのである。

又、『東大寺法華堂要録』応仁二年（一四六八）十一月三十日の条に、⁽²⁶⁾

一、十一月卅日、実相坊ノ用トテ油倉ニテ一貫カケノ次支始ル、五年マデハ親ノ辨ヘナシ、其ノ後八年々ニツレテ幾許辨ヘナルベシ、如何アラン、既七十歳ニ成ル人順次ノ事歟、浅増々々、後人可得其意也、

と記されており、油倉において頼母子講が行なわれていた事を示している。

以上からみて、油倉は、南北朝時代から室町時代にかけて、多方面から得た収入を基礎に、幅広く金融活動を行ったが、それは、必然的偶発的に起り得る金融活動ではなく、むしろ積極的であったといえる。

油倉は、東大寺寺領荘園の年貢徴収を請負っている。

年紀を欠いた文書であるが、遠江国蒲御厨において、

一、守護方より兵糧米過分ニ申かけられ、轡而被入譴責候之間御公用廿貫文又々道断候、(下略)

十二月十七日 蒲御厨東方諸公文等 進上 油倉江参御侍者御中

とある如く、油倉は、蒲御厨の年貢徴収にかかわっていた様子である。

播磨国大部庄の反銭も取扱っている。

請取大部庄反銭事

合式拾貫文者

右去年被相懸残分自油倉方請取如件

寛正五年甲申九月五日 灯油納所賢祐判

油倉御房

この文書は、東大寺に納めた反銭残分に対する灯油納所からの請取状である。^②

同様に、周防国の年貢徴収にも関与している。宝徳二年(一四五〇)十二月三日付、富田公用米送文に、^③

(端裏書)
あふらくらへ 富田午冬

参る

送進富田公用米事

合

乃米貳百八十四石六斗四升

船賃四十四石一斗

正米貳百四十石五斗四升

右御米者竈戸関薬師丸運上候、彼船兵庫着津之時、任船頭請取可有御寺納者也、仍状如件、

宝徳式年十二月三日

玉祐（花押）

油倉御侍者

とあって、享徳四年（一四五五）にも同様の文書が見られている。^⑩

又、享徳四年五月八日付の大前公文名得分米送文に、^⑪

乙春船 あふらくらへ参る

送進大前公文名御得分事

合

乃米貳十三石内

俵賃六斗九升

倉賃二斗三升

船賃三石六斗八升

正米十八石四斗

右御米者竈戸関船薬師丸ニ運上候、(下略)

享徳四年五月八日

油倉へまゐる

とあり、これと同類のものに、庁奉行得分米送状^②、厚東名得分米送文^③等がある。即ち、油倉の僧玉祐・玉叡等は、現地へ赴き、公用米を徴収し油倉へ送るといふ問丸的な活動を行っていた。ここに登場する玉叡なる人物は、文安元年(一四四四)、兵庫北関代官職を請負った人物である。玉叡は、北関代官職を請負うかたわら、富田荘へ行き、前述のように仕事をしていたのであるから、彼は、手腕家であったようである。

すでに南北朝時代、明徳元年(一三九〇)に、兵庫津へ着いた周防国衙の年貢中、正米五十石が、寺家から遣わされた使者の監督下に問丸の世話によって売払われている事実から^④、享徳四年のこの文書に記されている公用米も、船で兵庫津に運ばれ、同様に金銭にかえられ、油倉へ送られたものと思つてよいであろう。

又、問丸が、東大寺領の年貢等貢納物の輸送保管を引受けていた例は、寛正二年(一四六一)八月付、尼崎問丸請文安に、

請乞申

防州国衙正税送物問職事、

右彼御問職者、依道祐禪門推許被申東大寺、自油倉所被仰付也、仍彼御公用米錢雑具等無相違執沙汰可申候、
(下略)

尼崎別所三郎衛門丞

寛正貳年辛巳八月 日

友久

とある如くで、尼崎の友久なる人物が問職を引受けている。このように、問丸の活動が活発になり、しかも、その問丸の世話によって、年貢米が金銭に替えられ油倉に送られるようになると、油倉への収入も、当然、米より現金が多くなっていったと思われる。

以上、遠江国蒲御厨・播磨国大部荘・周防国富田荘における年貢徴収請負の例を示したが、これら年貢徴収請負による収入は、相当な金額にのぼったと思われ、油倉の現金収入の増加を促したのである。

油倉の財政を豊かにし得た最大の要因は、兵庫北関代官職請負による収入と言って過言ではない。

延慶元年（一三〇八）、兵庫関石別升米及び置石が、東大寺八幡宮料として永代施入される事になった。延慶元年十二月二十七日付、伏見上皇院宣案に、

撰津国兵庫嶋升米事

永代所寄付東大寺八幡宮也、於嶋修固者、寺家致其沙汰、以餘剩可為顯密御願之料所、然者西国往反船、不論神社仏寺権門勢家領土貢、云上船石別升米、云下船置石、任先例可致其沙汰之由、可有御下知之由、院御氣色所候也、仍言上如件、

延慶元年十二月廿七日

經親奉

進上東大寺別當僧正御房

追言上

雑船事任傍例可致沙汰之由、因可有御下知

とある。即ち、関税の全収入は、永代東大寺八幡宮に寄進し、もし余剰分がある場合、東大寺にこれを収納し顯密

御願の料とするように、又上船に石別升米税を、下船には置石税を課するようにとあり、これ以後、東大寺は、兵庫関と密接な関係をもつようになる。

延慶三年四月二十九日、鎌倉幕府は、御教書を発し、それにより東大寺は、雑掌を置き兵庫関を管理させた。

正和二年（一一三三）二月、東大寺東塔が雷火により焼失した。^⑤これにより、元亨元年（一一三一）には、神崎・渡辺・兵庫三津の高船目錢税の半分を東塔修理料とし、四分の一を以て東南院修造の料足とする事が許された。

ついで、嘉暦二年（一一三七）二月には、三津の商船目錢税の全収入を大仏殿拂葺料以下の料足とし、その内四分の一を東南院修造料とするよう、後醍醐天皇綸旨が下されている。^⑥更に、同年四月二十七日、当年より八ヶ年、大仏殿拂葺料足として、三津の商船目錢税の関務執行権が、東大寺に付与されている。^④

最初、東大寺は、雑掌の僧を補任し、寺家の直轄としていたが、応長元年（一一三一）六月十四日付、東大寺衆議下知状に、

兵庫関雑掌職事、月割用途数百貫、不被致沙汰、對捍之間、御願之用脚令欠如、島修固又一向不致其沙汰、と見られるように、この頃には、東大寺から派遣された関務雑掌は、関税も納入せず、築島も修理しない有様であった。これが、暦応二年（一一三九）になると、関務は、雑掌代官の請負制となっており、関の全収入の三分の二を東大寺の収入とし、残り三分の一を関収入としている。^⑧少し時代は降るが、応永三十年（一四二三）の兵庫問丸請文を見ると、

兵庫^{南北}両関御教書以来、生口船関役事、彼船頭等今度令着岸之時、以前未進分、関所沙汰人等相共可致執沙汰、次於向後者、不可取次申関役之者也、仍請文之状如件、

応永三十年八月四日

孫太郎在判

奉行飯尾新左衛門在判裏封

となっており、孫太郎以下三人の者が、兵庫両関税請負を行っている。猶、この頃から兵庫関が南北に分立している。その分立の時期は明確でないが、経島に設けられた税関を北関と称している初見は、次に掲げる永享五年（一四三三）の幕府奉行衆奉書である。^⑤

摂津国兵庫北関代官職事、島修固無沙汰云云、太不可然、所詮於御願者、厳密可被執行之、至修固者被仰付正實定光訖、早可被渡彼関所於阿人代之由候也、仍執達如件

永享五

五月廿八日

為行（花押）

貞連（花押）

貞清（花押）

東大寺雜掌

これにより、永享五年頃には、北関関務は、代官職補任制になっていることがわかる。この頃に至って代官職補任制は、固定的な制度となっているようである。即ち、永享八年四月二日には、小島次郎左衛門光清以下三名、文安元年（一四四四）四月には、上田重次・岡正清等が代官職に補任されている。^⑥

ところが、文安元年十一月十五日付、北関升米并置石代官請文に、^⑦

請申、東大寺八幡宮領摂津国兵庫北関升米并置石代官職事、

右升米并置石土貢、毎年漆百伍拾貫文、此外相国寺・等持寺両寺之国料代官方沙汰分五十貫文、都合八百貫

文、可有寺納、月割自正月至十一月、各添拾貫（中略）若被破新過書等者、可公用増申候、（中略）亦於彼關所者油倉請申候、私而不可申付余人候、（下略）

文安元年甲午十一月十五日

油倉
玉叡（花押）

とある。ここに至って東大寺油倉が、北関代官職を請負っているのである。寺内の者が請負う事は、東大寺にとつて歓迎すべき事であつたはずである。この文書によると、油倉は、代官職を八百貫文で請負っており、もし新たに兵庫関通過船の内で課税する事になれば、その分だけ請負料を増加することになっている。伊奈健次氏が、その論文中に述べておられるように、兵庫北関の請負料が八百貫文であつたのに対し、関税収入は、鎌倉時代、元徳・正慶の頃には、年収千二百貫文以上あつたらしく、^⑤その頃以後、船の通行は、増加する一方であるから、関税収入も当然増えていると考えられる。すると、油倉の収入は、明確な額はわからないが、相当な金額であつたとみて間違いない。

ここにおいて油倉が、直接職務を行い、代理人又は代を勝手に任命しないと述べているにもかかわらず、寛正四年（一四六三）八月には、

補任 兵庫北関代官職

淀藤野三郎左衛門方

右、件人為彼代官職、毎月有限公用錢、無未進懈怠可有寺納、（下略）

寛正四年癸未八月廿九日

とある如く、^⑥淀の藤野三郎左衛門を北関代官職に任命している。これについて、伊奈健次氏は、康正二年（一四五六）年頃の池田筑後守による北関関務の妨害に起因しているかもしれないとしておられるが、^⑦原因は明確でない。

しかし、油倉が、寺外の者に代官職を委任しなければならない余程の事情があったとみてよい。

いづれにせよ、藤野三郎左衛門の北関代官職補任により、東大寺に納入される金額は減少している。寛正四年八月廿九日付、三郎左衛門請状によると、^⑤

升米置石

東大寺八幡宮領摂津国兵庫北関請口事、合陸百貫文契約早、此内北野御経四拾貫文、自代官方可有沙汰、毎月参貫五百卅三文宛、残定五百六十貫文可有事納、

となっている。従って請負料は、六百貫文で、実際に東大寺に納入される金額は、五百六十貫文に減少している。しかし、ここに「自代官方可有沙汰」とある事から、あくまでも藤野は、油倉の命によって関務を行っていたように見受けられる。この事から察して、藤野を代官職に補佐したけれども、油倉が、その実権を握っており、油倉にそれ相当の収入があったとみてよいのではないだろうか。

しかし、時代は降って天正十一年（一五八三）にもなると、兵庫津船役は、兵庫正直屋宗興によって納められており、油倉の名を見ることはできない。^⑥

室町時代に、当時奈良で大量の油生産及び、販売を誇っていた興福寺の符坂油座と、油倉との間に、商業上の争いが生じている。

符坂油座は、もともと、春日の白衣神人で組織されたものであり、しかも、その神人は、大乘院門跡の寄人でもあったが、鎌倉時代末期には、すでに、興福寺の傘下に属する一座でありながら、その生産・販売において、非常に活躍を示した。永仁四年（一二九六）には、東大寺灯油田東喜田莊からの灯油料は、銭納されており、^⑦それ以後、頻繁に灯油料の銭納例が見られる事から、この頃既に、油倉は、符坂油座からも灯油を購入し需要に応じていたと察する。

とにかく、正和頃には、符坂油座は、奈良における灯油販売を既に独占していたようで、油倉へも灯油を供給していた事が、油倉と符坂油座との争論によって知られる。

正和頃、符坂の座衆の一人観音太郎という者が、油倉沙汰人から油代四十貫文の銭を受け取りながら、灯油を納めなかった為、大仏殿灯油が欠乏した。そこで油倉沙汰人は、座衆以外に問職を定め、そこから油を購入しようとしたが、観音太郎は、これを妨害し、一滴も油を売らせなかった。又、油倉沙汰人の灯油製造に関しても異議を唱えている。即ち、

東大寺油倉沙汰人申、欲早被停止符坂座衆乱入狼籍事

右東大寺大仏殿灯油為聖沙汰、買坂座衆観音太郎油備大仏殿之处、乍請取四十余貫之錢不弁油之間、依及灯油闕如就別人擬買油之处、観音太郎挿害心狠致方々成煩、依之立油臼之处座衆等可撤却臼之由付謝申被下訴状之間陳申畢、不相待御裁断符坂座衆致乱入狼籍之条難堪之次第也、然急速為停止彼等狼籍、謹言上如件、

正和二年十一月 日

とあって、又、同じ頃の文書に、

(備後書)

「符坂油売陳状案」

東大寺油倉沙汰人等申

欲早被停止符坂座衆非分濫訴事

右東大寺大仏殿灯油事、為聖沙汰弁備之处、彼座衆等構虚言申売買由之条、太以不可然、大仏殿不退常灯油之外全不及沙汰也、売買之条為虚誕之上者、可被停止何事哉、不足言申状也、早為被棄捐件虚訴、粗披陳言上如件、

正和二年十一月 日

とある。⁽⁷⁾ 但し、この件に關しては、實際に油倉が、常灯油以外の目的の油を製造・販売していなかったとは断言できない。なぜなら、これを立証する史料がないので断言できないが、当時、非常に活発に經濟活動を行っていた油倉が、その収入源の一つとして、灯油の製造・販売を行っていたと考えても不審はないし、符坂油座が根柢なく異議を申し立てると思えないからである。

いずれにしても、奈良において、符坂油座の独占的販売が、相当強固なものであったのは事實である。ところが、至徳二年（一三八五）十月二十八日の文書及び、同年十一月の文書によっても、符坂油座は、東大寺に対し同油座以外からの油購入に苦情を言わないと約している。猶、油倉は、この時、油問職を楞伽院に譲っている。ここに、十月二十八日付の文書を掲げると、

東大寺大仏殿灯油問職事、符坂寄人等、為惣座之計之由、掠申、打止商買候之間、定灯忽及退転候之条、返々以外之次第候、所詮往古支証分明之上者、可為楞伽院進止候、向後惣座衆等猶申違乱候者、就張本可有御罪科候、且以此之趣可被仰遣楞伽院之旨所候也、恐々謹言

（至徳二年）
十月廿八日

□□

という具合である。いかなる理由で符坂油座が譲歩したかは、不明である。

このように、一応收拾がついたはずであるが、大仏殿灯油に關する油販売人と東大寺との争いは、これ以後も続いている。『大乘院寺社雜事記』明応二年（一四九三）十二月二十八日の条に、

一、東大寺大仏殿御油粉失事、昨日湯越請可有之处、油売不罷出之間無之、彼者ハ古市披官人云々

とある。⁽⁸⁾ この油売は、おそらく符坂油座の者であろうと思われるから、符坂油座は、至徳二年に譲歩をみせたにも

かかわらず、明応二年頃に再び東大寺と争論を起しているのである。

ここで少し時代は戻るが、観応二年（一三五二）三月、淀の間丸皆阿弥が、油問職を抵当にして、大仏殿の油の錢八百文を借りている事実がある^⑧。この皆阿弥は、油倉から油問職を請負い、淀という場所から考えて、おそらく、大量の油が生産された山崎の油を油倉に納入していたのではないかと考える。とすれば、この頃には、符坂油座のみに油の供給を頼っていたのではなく、淀の間丸を通じて、山崎からも油の供給を受けていたと察してよいだろう。

四

先述の如く、油倉は、鎌倉時代から室町時代にかけて活発な経済活動を行い、発展を遂げたのであったが、天正年間の後半にもなると油倉に関する史料が、散見できないことから、その経済活動に終止符が打たれたと思われる。

もし経済活動が終ったとすれば、いかなる理由かを考えるに、この天正年間には、いわゆる戦国時代と画される時代の一時期であって、各地の大名達が、各々大名領を確立した時期である。即ち、油倉が、先述の経済活動を続行する場合、各地の大名との衝突は避け難く、油倉はもとより、東大寺の如き一大寺をあげても、大名と対抗しなからの活発な経済活動は不可能であつたろう。まして、油倉にたとえ過去の様々な経済活動による貯蓄財力があつたとしても、東大寺の一機関にすぎない油倉が、この時代の流れに押し流されることなく、武力を背景とする大名達と拮抗して経済活動の続行を図るのは、不可能であつたはずである。よって、油倉の収入源たるものは、ほとんど大名達に侵略された形となり、油倉は、衰微の一途をたどらざるをえなかったものと思われる。

五

東大寺油倉の寺内に対する特異な經濟活動について、一応の考察を行ったが、ここに再び、その經濟活動を中心に、油倉の実態を見ながら、その活動の変遷をまとめる事にする。

本来、灯油の貯蔵庫に過ぎない東大寺の油倉は、平安時代末期から、灯油料として米を收納していた。ところが、鎌倉時代に入り、備前国野田莊が灯油田として与えられた頃から、灯油の保管以外に米錢をも保管し、東大寺内の防衛に関する金融をし、造管用材を保管すると共に、それに関連して造営・修理に關与するようになった。

更に、南北朝時代には、勸進所と一体化し、それ以後、東大寺領莊園の年貢徵收請負・兵庫北関代官職請負、それらに関する金融活動を行うという急速な發展を示した。

油倉が、これらの經濟活動を行い得た原因を考えるに、灯油料田増加に端を発しているには違いないが、その要素を生かすものとして、油倉の勸進所との一体化があったと思われる。油倉の經濟活動を見る限り、本来、勸進所の行ってきた仕事を肩代りする事によって得た収入が、大部分を占めているからである。換言すれば、勸進所と一体化した油倉は、勸進所の弱体化を契機に、勸進所管轄の仕事を横領したと言えよう。これによって、勸進所に入るべき収入が、油倉へ入ったのであるから油倉の収入の増加は、当然ともいえる。ただ、これらの仕事を巧妙に、かつ積極的に、より多くの収益と結びつけた事は、油倉管理者の手腕といえよう。その点については、先述の文安元年、兵庫北関代官職を請負った玉叡の如き經濟的手腕を持ち合わせた人物の存在が幸いしている。

又、それに加えて、鎌倉時代・南北朝時代・室町時代にかけての時代は、まだ、大名領が確立していなかった事から、東大寺の一機関たる油倉のユニークな經濟活動を許す余地があった。

いずれにしても、これらの好条件を基盤にしたとはいえ、本来、小規模な立場の低い一機関であった油倉が、めざましい活躍を見せた事実、そして長い東大寺の歴史の中の一時期ではあったが、東大寺経済の中心的存在として、脚光を浴びるに至ったという事実は、東大寺史上、驚くべき事であるといえよう。

註

- ① 筒井英俊『東大寺論叢』論考篇、第二章九、油倉油壺、三三九頁
- ② 東南院経庫、梁行五・八五m、桁行八・八五m
手向山八幅宮宝蔵も、ほぼ同じ大きさである。
- ③ 『東大寺年中行事記録』一四一―一四五
- ④ 同右、一四一―一六〇
- ⑤ 永村真「中世東大寺子院の経済活動と財政構造」(『南都仏教』三十六号)において、永村真氏は、「応長二年までに、勧進所も水門に移住し、楞伽院院坊舎を中心として油倉の坊舎が水門に完成した」としておられる。
- ⑥ 『大日本古文书』家わけ十八、東南院文书之三、八〇頁
- ⑦ ⑥の文书の端に、偽文书の疑いありと記されている。
- ⑧ 『平安遺文』古文書編、第七卷、二七六一頁
- ⑨ 同右、二七四五頁
- ⑩ 『東大寺統要録』寺領章、三三二頁(『続々群書類従』十一、宗教部)
- ⑪ 同右、三二二頁
- ⑫ 『大日本史料』第四編之九、七十六頁
- ⑬ 『大日本古文书』東大寺文书之六、二二八頁
- ⑭ 『東大寺法華堂要録』三八六頁(『続々群書類従』第五、記録部)
- ⑮ 『東大寺文书』一ノ二十四
- ⑯ 同右、一ノ二十四、油倉照定米出記
- ⑰ 伊奈健次「中世東大寺油倉の経済的活動」(『歴史地理』第七十五卷六号)四頁より再引用
- ⑱ 『大日本古文书』東大寺文书之六、一三五頁
- ⑲ 同右、東大寺文书之九、六十一頁
- ⑳ 『東大寺文书』一ノ二十四
- ㉑ 『東大寺法華堂要録』三六六頁
- ㉒ 同右、三七九頁
- ㉓ 『大日本史料』第六編之七、四九三頁
- ㉔ 『大日本古文书』東大寺文书之七、一六二頁
- ㉕ 『大日本史料』第六編之六、『東大寺文书』一〇六九頁
- ㉖ 『東大寺法華堂要録』四〇二頁
- ㉗ 伊奈健次、前掲論文、九頁から再引用。伊奈氏は、蒲御厨を近江国としておられるが、これは、遠江国のあやま

りである。

23 同右、十頁から再引用

23 『神戸市史』資料一『東大寺文書』三二三頁

30 同右、三三一頁

31 同右、三三二頁

32 同右、三三三頁

33 同右、三三四頁

34 同右、二六九頁

35 『東大寺文書』四ノ七十一

36 『神戸市史』資料一『東大寺文書』一一八頁

37 同右、一二二頁

38 『東大寺文書』一ノ三、文保元年五月二十一日付、東大

寺衆徒申状

39 『神戸市史』資料一、一一五頁

40 同右、一四五頁

41 同右、一四七頁

42 同右、四二三頁

43 同右、二三〇頁

44 同右、二八五頁

45 同右、二九二頁

46 同右、二九二頁、北関升米并置石代官職請文

請申 東大寺八幡宮領摂津国兵庫北関升米并置石代官職事、

右升米并置石土貢合毎年漆百伍拾貫文之内、肆拾貫文者
北野御経 毎年三貫三百、殘漆百拾貫文可有寺納 至十一月者
各六拾貫文宛於十、二月者五拾貫文、(下略)

小島次郎左衛門

光清代子息重増

永享八年 丙辰卯二日

孫左衛門

清正代子息廣正(花押)

稻毛

信久(花押)

47 同右、二九七頁、北関升米并置石代官職請文

48 同右、二九八頁

49 伊奈健次、前掲論文、十七頁

50 『神戸市史』資料一、三四五頁

51 伊奈健次、前掲論文、十九頁

52 『神戸市史』資料一、三四五頁

53 同右、三八五頁、豊臣秀吉船役請取状

54 『大乘院寺社雜事記』長祿二年十月二十六日の条

55 『東大寺文書』四ノ三十四

56 同右、四ノ四十三

57 『大和古文書聚英』所収『東大寺文書』油倉沙汰人陳状案

- ⑤⑧ 豊田武「大和の諸座」〔『歴史地理』六十六卷第三号〕七
十四頁から再引用
⑤⑨ 『東大寺文書』四ノ八十八

- ⑥⑩ 符坂座衆の中には、古市の披官となる者が多かった。
⑥⑪ 『東大寺文書』四ノ七十五、淀問皆阿弥借用状
（文学研究科博士後期課程・日本史学専攻）

